

みる つくる かたる

千葉県立美術館報

VOL.9 NO.5

(通巻 39号)

昭和58年 3月23日発行

編集・発行人 高橋在久

〒 260

千葉市中央港1丁目10番1号

☎0472-42-8 3 1 1 (代表)



中西利雄「人物」

盛況を誇る美術団体展

と今後の課題

本館も来年度は、いよいよ開館十年目を迎えることとなった。この間、本館を会場とする美術団体の展覧会の開催は、年毎に増加の一途を辿っており、その盛況は、大いに慶賀すべきことであるが、反面、多少の問題点も生じつつある。一つは、量の問題であり、又内容資質の問題である。

昭和五十八年度の展示室利用申請は、現在、六十八団体を数え、年度を通して未使用の展示室は、あと数室を残す

団体利用一覧

年 度	団体数
49	9
50	23
51	35
52	44
53	52
54	51
55	58
56	61
57	61
58	68*

※3月1日現在予定数

だけの状態となっており、このままでは、近い将来に利用調整のつかなくなることは目に見えている。

展示室利用美術団体の量的な増大に対しては、現在二週間開催している団体の会期の短縮による解決も提案されて

いるが、一律に短縮することには、多くの問題が残るであろう。

ところで、本館における会場事業は、単に空いている展示室を提供するという意味合のものではなく、県民の作品発表の場を確保し、創作活動の拡大と活発化を図り、より多くの県民に美術鑑賞の機会を提供することを、積極的に目指しているものである。

即ち、本館が企画して実施している展覧会とともに、車の両輪をなすものと位置付けられており、本館の事業の特色の一つとなっている。

従って、本館を会場とする美術団体展は、個々の作家の作品発表の場であると同時に、全体として質の高い展覧会であることが要求されている。

実際に、昭和五十七年度における六十二団体の展覧会を見て、その多くは、意欲に溢れた、充実した作品の発表

の場であったといえよう。

しかし、一方で、マンネリズムに陥り、活気のない展覧会を惰性的に開催している団体が、いくつも見られたことは、非常に残念なことである。本館における美術団体への会場貸与に際しては、地域主義に基づいた考え方から、対象となる美術団体を次の様に定めている。

- 一、団体としての目的と規約が明確であること。
- 二、千葉県内に事務所があり、会員ならびに出品作家が、千葉県在住又は出身者で過半数を占めていること。

しかし、これは、あくまでも原則的な規定であり、展示室が、年間を通してフル回転の情態にある今後については当然これに加え、展覧会そのものの意義・内容を更に一層問題とする規定に移行

特別展

「金工の世界」終る

1・21〜2・24

本展では、明治以降の金工芸術の歩みを概観し、それぞれ作品の持つ独特な技と美を味わうとともに、その時代背景、さらに今後の展望などを探る機会とした。

過去にこのような内容の屋覧会が少なかつたこともありこのたびの鑑賞により金工芸術への関心を深められた方々も多かつたようである。今後多角的な面から金工芸術をとらえ、皆様へ鑑賞の機会を提供できれば幸甚である。

しなればならないであろう。即ち、開催趣旨が明確化されているか否か、展示面積に対して作品点数は適正であるか否か、見せるための展示の工夫が行き届いているかどうかなど、具体的な評価基準のもとに審査を加えて、団体の数量を調整しなければならぬ事態になっていることである。

評価選考の方法については、各美術団



団体展風景

は、各美術団

体による自己採点評価あるいは相互評価の制度、更に諮問機関を設けて評価する制度等、様々に考えられるが、公平でかつ有効な方法の検討が目下の課題となっている。

ただし、一方では、例えば千葉展の様に、各団体が合同して一つの展覧会への意欲を示したり、あるいは、公募化、審査制度の導入を図って自主的に変革をとげようとする団体が現われるなど、各美術団体の側における動きにも大変興味深いものがある。

ともあれ、本館の展示空間には限りがあり、無制限の使用が許されない以上、質的な淘汰の時代に入りつつあるということである。

57年度

美術館研究員会議報告

本年度第二回研究員会議が

去る二月十八日(金)本館会議室
において行われた。資料整備
及び普及活動の調査研究につ
いて、本年度は特に普及活動
を中心にこれまでの成果及び
問題点等について話し合われ
た。主に次のことがらがあげ
られた。

・生徒へのアンケートから、
展覧会(デパート展等も含む)
を見に行ったことがある生徒
が66%あり、比較的多くの生
徒が興味・関心を示したが、
県立美術館へ行ったことがあ
る生徒は10%足らずなので、
今後も利用をすすめたい。
・名画をもっと掲示してほ
しいとか、美術館につれていっ
てほしいとの声も多いので、
できるだけ美術品にふれさせ
たい。
・地域的になかなか美術品に
ふれさせることができないの
で、古い道具や民具等を学校
に持ってきてくれるよう各家
庭に呼びかけたり、近くの遺
跡の発掘を見学して、文化遺
産にふれさせるよう努力して

いる。

・美術館から送られるポスト
ーや図録はできるだけ活用し
ているが、美術に対する生徒
の興味・関心を高める上から



研究員会議

有効である。
・家庭にある美術の本やテレ
ビの美術番組の利用をすすめ
ているが充分とはいえない。
・美術館見学を実施したいが
種々の問題があり難しい。
・教育資料(複製画)は、も
っと生徒に見せたいが、美術
館に取り来たり、返却した
りする時間がとりにくい。
・家庭でも、もっと美術につ

いて話し合ったりして美術に
対して関心を持つようにして
ほしい。

・複製画については、もう少し
し外国作家の作品がほしい。
等の貴重な意見が出され、

そのあと、開催中の特別展「金
工の世界」を鑑賞した。
なお、本年度の研究員は左
記のとおりである。

飯田能弘(海上町立海上中学
校教諭)

池田伊子(千葉市立末広中学
校教諭)

石倉総子(千葉市立花園中学
校教諭)

特別展「金工の世界」
にもなう第二回美術
講演会が去る一月二十
三日(日)午後二時より、
「県民アトリエ」講堂
において、講師に香取
忠彦氏(東京国立博物
館金工室長)を招いて
行われた。「近代金工へ
の道」と題して、わが
国の金工の流れについ
て語られたが、特に氏
は、近代金工の上で後
に大きな影響を与えた人とし
て、津田信夫と香取秀真がい
る。津田信夫はヨーロッパの
新しい技法を取り入れ進歩的

トピックス

校教諭)

岩沢いづみ(千葉市立さつき
が丘中学校教諭)

大木貞夫(八日市場市立須賀
小学校教諭)

香取義春(佐原市立福田小学
校教頭)

佐藤修(佐原市立佐原中学
校教諭)

田辺宏(勝浦市立興津中学
校教諭)

利倉栄子(千葉市立天戸中学
校教諭)

原田久徳(千葉市立新宿中学
校教諭)

(順不同、敬称略)

な考えで新しい金工をめざし
た。一方、香取秀真は日本や
中国の伝統を守りながら芸術
の境地を築こうとする古典派
であった。こ
の二つの流れ
は、それぞれ
対立したかの
ようにいう人
もいたが、全
体の構成が整
い、時代感覚
の表出に重点
が置かれ、共
により高い芸
術を目指したものであったと
いう。また、氏は現代の金工



美術講演会 香取忠彦氏

展示されている作
品を見ながら、材
料、技法等につ
いて解説されたが、
質問等も多く出さ
れ活発な語る会で
あった。

また、今回は予
想を大きく上回る
参加者があり、会
場を研修室から急
ぎよ講堂に変更するほどの盛
況であった。

新収蔵作品紹介 (X)

昭和49年の開館以来、浅井忠を一つの核として様々な関係資料の収集を進めてきているが、その一つに水彩画がある。浅井の水彩画については定評があるが、そこで、浅井の水彩画の収集にとどまらず、広く近代から現代への水彩画の体系的収集を図るべく努めている。

展覧会に於ても、近代洋画における水彩画の果たしてきた役割、良さを見直そうと55年には「水彩画の再発見展」57年には「中西利雄展」また、常設展でも水彩画のコーナーを設けるなどしてきている。そこで今回は、昭和56年度に新たに加えることのできた



不破章 「二女」



不破章 「三人姉妹」

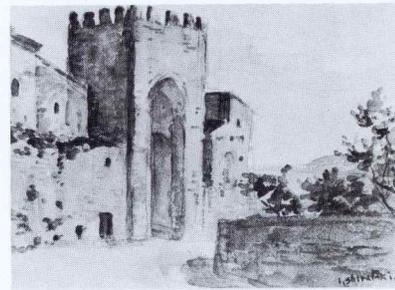
水彩画の中から紹介していきたい。

不破章・白滝幾之助

●寄贈
不破クラ氏より
不破章作「描く〇君」(昭和17年・以下○内数字は制作年)

「裁縫女」(同18) 「二女」(同28) 第9回日本美術展覧会特選 「三人姉妹」(同31) 第12回日本美術展覧会岡田賞 「浴衣」(同35) 「ハンブルグ」(同38) 「ノルマンジーのホテル」(同40) 「バンコクの水辺」(同41) 「白い砂」(同42) 「支

那服の女」(同44) 「榕樹の家(平安城址)」(同45) 「台湾農村の風景」(同45) 「白いブラウス」(同49) 「ルッセルスハイム」(同49) 「御苑」(同49) 「奥鬼怒の湯治場」(同51) 「麗日新宿御苑」(同52) 「台湾の農家」(同53) の計18点。



白滝幾之助 「伊国アシシ」

た」と述べている。以来、日本水彩画界の支柱的存在として活躍してきたが、今回ご寄贈の作品群は、単に一人の作家の画跡を辿るだけでなく、その年代における水彩画界の一つの在り方を示すものともなっている。

白滝幾之助
明治6年〜昭和34 (1873〜1959)

●購入
白滝幾之助「エジプト」(大正11) 「伊国ナポリ」(同12) 「伊国アシシ」(同12) 「テームス河」(昭和8) 「海」(不詳) の計5点。

不破章 明治34年〜昭和54年 (1901〜1979) 東京生れ、明治末から大正にかけて水彩画は急速に広まり、大下藤次郎著「日本水彩画写生旅行」等が圧倒的な人気を博し、不破章もまたこれにより「水彩画の世界に憧れを感じ

兵庫生れ。東京美術学校卒業。山本芳翠、黒田清輝、ラファエル・コランに学び、文展・帝展・日展を中心に活躍し、昭和27年日本芸術院恩賜賞が授与された。油彩、舞台装置にと多方面にその才を発揮しているが、水彩画においても写実的な優れた作品を残している。

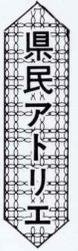
不破章作「二女」ノルマンジーのホテル、白滝幾之助作「伊国アシシ」海は、現在常設収蔵作品展において展示中である。

表紙作家の紹介

中西利雄

(一九〇〇〜一九四八)

東京に生まれる。はじめ真野紀太郎・小山周次などに学び、東京美術学校に入学。在学中から日本水彩画会展・光風会展に入選し、頭角をあらわす。一方では、蒼原会上社会を結成し水彩の振興につとめる。一八二八年渡仏し、ガッシュの研究等を試みるなど精力的に研鑽に励み、サロン・ドートンヌに出品。帰国後は、光風会展・帝展に出品するが、帝展改組にあきたらず、芸術運動の純粹化を唱え新制作派協会を結成した。中西は、生涯を通じ水彩により油彩に劣らぬ絵画表現をめざし、流暢な描写と明快な色調を駆使して、近代性あふれる新鮮な水彩画を描きつづけた。この作品は、第一回新制作派協会展に出品した記念的な作品である。



「かたる・つくる」：知る

「かたる・つくる」の拠点
昭和五十五年「かたる・つくる」の活動の県民アトリエ棟が竣工した。

「かたる」については約二百席の講堂、五十席の研修室が講演会、研修会等に利用され、「つくる」については三実技室と窯場が、洋画・彫塑・工芸などの講習に活用されている。

さらに美術資料の情報センターとして、図書を整備し、開架式（利用者に書架を公開して自由に検索を許す）により、情報資料室の一般閲覧を試みたのは同年九月であった。

アトリエホール

本館の玄関を入り右に折れるとホールに出る。

このホールにはソファアが置かれている。壁面には他館の展覧会のポスター用掲示板や、本館におけるアトリエ棟の行事予定表を設け、一隅の雑誌棚の情報誌とともに「みる」情報を提供している。

また、長谷川昂氏「安息」

中島幹夫氏「風の肖像」の彫

刻二点は、展示棟の展示作品とは違った身近な鑑賞空間をつくりあげている。

情報資料室

ホールに続く当室は、美術に関するあらゆる資料収集に努め、調査研究の公開活用の場である。

図書資料は、前述したとおり、開架式により、一般書・絵画・版画・書道・彫刻・工芸に分類配列している。

特に、本館収蔵作品については、掲載図書の他、作家個人画集・作家の研究用基本図書等調査研究資料の収集に努めている。

一例として、先日行なわれた「金工の世界」で紹介された文化勲章受賞者、香取秀真の著作物として

○日本古鏡図録 明治45年

○東京鑄金会

○金鼓と鰐口 大正12年

○志村綱平

○日本金工史 昭和7年

○雄山閣

○随筆ふいご祭 昭和10年

○学芸書院

○日本の鑄金 昭和17年
三笠書房 等

もう一人の受賞者、東山魁夷も画集はもちろんのこと著作物がある。

○東山魁夷自選画集 昭和52年 美術出版社

○東山魁夷昭和三大障壁画 昭和52年 実業之日本社

○代表作十二選 昭和52年 集英社

○泉に聴く 昭和47年 毎日新聞社

○馬車よ、ゆつくり走れ 昭和50年 新潮社

○風景との対話 昭和42年 新潮社等

その他、当館収蔵作品の中心である浅井忠をはじめ、石井柏亭、梅原龍三郎、クールベ、コロッセ等の資料もあるので是非手にとつていただきたい。



アトリエホール及び情報資料室入口

美術雑誌は、特に情報源としての利用価値が高い。主なものは、次のとおりである。

○アトリエ 月刊 アトリエ出版社

○絵 月刊 日動画廊

○近代の美術 隔月 至文堂

○芸術新潮 月刊 新潮社

○三彩 月刊 三彩社

○日本の美術 月刊 至文堂

○美術手帖 月刊 美術出版社

○萌春 月刊 日本美術新報社

欠号等の詳細についてはお尋ねいただきたい。

その他、全国各地の美術館で開催された展覧会のカタログも、終了した展覧会の足跡として、又一著作物として貴重な資料である。

当館主催の展覧会カタログも保存してあるので、御利用いただきたい。この部門は、公共図書館では見ることが出来ないものである。

新しい情報を得る手段として新聞にも眼を通したい。

現在の美術界の様子や展覧会の内容がカラー写真等で紹介されている記事は楽しい読

みものである。

○新美術新聞 旬刊
(縮刷版もある)

○書道美術新聞 月刊

○アートニュース 月刊
(一月の展覧会案内を掲載)

○美の手帖 月刊

その援助が出来るよう、情報資料室の整備に努め、利用に供したい。

現状とお願い

閲覧者の中には、すでに常連の人でもきははじめ、展示棟とともに、除々に馴染まれていくようである。

しかし、歩きはじめたばかりの情報資料室は、質・量ともに十分とはいえない。

より充実した情報資料室にするため、美術図書・展覧会カタログ・美術雑誌など御寄贈いただけるものがあれば、お知らせ下さい。

利用案内

開館日 火・水・木・金

(国民の祝日を除く)

開館時間 十二時半～十六時半

○図書の室外貸出し及びコピーのサービスはありません。

○大きな手荷物、ホール右側のコインロッカー(無料)をご利用ください。

ごあんない

◎常設収蔵作品展

3月2日～3月31日
4月1日～8月28日

団体展 (4月～6月)

・自然保護写真コンクール入賞作品展
4月5日～4月10日

・第20回全日本総合書道大展覧会
4月12日～4月17日

・武蔵野美術大学校友会千葉支部長
4月12日～4月17日

・現代書家一、五〇人展
4月26日～5月1日

本館友の会会員による「葉美会展」が、本館第七室において去る2月15日(火)から27日(日)まで開催された。「葉美会展」は、本年度で7回を迎え、出品参加者は60名に達し、出品点数は95点を数えた。

・千葉等迎会展
5月3日～5月8日

・千葉新協展
5月3日～5月15日

・第9回歩会彫刻展
5月3日～5月15日

・第7回墨の県展
5月10日～5月15日

・第28回二科支部展
5月17日～5月22日

・二紀会千葉県支部展
5月17日～5月22日

・第10回千虹会日本画展
5月24日～6月5日

・第14回表美展
5月24日～5月29日

・千葉ーミシガン交換美術展
5月24日～5月29日

・第6回一陽会千葉支部展
5月31日～6月5日

・貌展
5月31日～6月5日

友の会「葉美会展」開かる

日頃の研修を積んだ会員の作品が七室を埋め、お互いの作品を鑑賞し合い、創作の楽しさを語る和やかな発表展覧会であった。

最終日には、三時から、武内和夫氏(千葉大学教授)の批評指導が会場内において行われた。

来館者

12月

韓国文化芸術研究会三名

1月

松戸市教育長他二名
横浜市民局市民文化室五名

文化課長他二名、熊本県立美術館、埼玉県立近代美術館各一名

銚子市教育委員会四名
教育長

新潟県美術館一名
財務課長

金工家鈴木治平氏

横浜市役所技監部長他
船橋市長

岩手県教委文化課二名
岩手県立博物館一名、

信濃美術館一名、芸術院会員帖佐美行氏、佐治賢使氏

京都市美術館専門課長
他二名、金工家津田永

寿氏

知事、県立中央図書館
長、東京芸術大学資料

館泉宏尚氏
東京芸術大学平松氏、
東京国立博物館原田氏、

3月

1

国立近代美術館種田氏
名古屋市立美術館一名

日誌抄

12月

11 洋画入門講座(12日)
14 58年度展示室利用に伴う調整会議

28 御用納め

1月
4 御用始め
16 常設収蔵作品展終了

富取風堂氏

去る二月十二日、午後三時四十三分、急性気管支炎のため国立千葉病院で逝去九十歳。日本画家、日本美術院評議員・監事、千葉県美術会顧問。

本県美術界の最長老であり、関東大震災以後市川市に移住。県展の創設に参加する一方、県文化財専門委員もつとめ、また、当館の設置に対しても物心両面の協力を賜った。

明治二十五年東京日本橋に生れる。同三十八年松本楓湖に師事。大正三年今村紫紅、速水御舟と共に赤曜会を結成。同四年再興第二回院展に発入选、同十三年日本美術院同人に推挙された。

18 特別展「金工の世界」
始まる(2月24日まで)

23 美術講演会「近代金工への道」講師・香取忠彦氏

28 資料審査委員会
29 七宝焼入門講座(30日)

2月

6 美術を語る会 話題提供者・鈴木治平氏
15 県博協役員会
18 研究会会議

編集後記

Vol.9も本号をもって最終版となりました。新年度からは10年目に入ります。関係各位と県民の皆様の御指導、御愛顧をいただきましたことを末尾ながら感謝いたします。春とともに58年度も暖かい御支援をいただき、館員一同一層の努力を期しておりますのでよろしくお願い申し上げます。